

クローズアップ・サンガ

本願寺茶房

——天岸淨圓師のご法話より——

多村至恩

(たむら しおん)

去る四月五日、「宗報」や「本願寺新報」でご案内しておりました「本願寺茶房」の公開収録が行われました。「本願寺茶房」とは、アカデミックな話に終始し、難しくなりがちな「儀礼」について、大胆かつ気軽に、その研究内容を伝える目的で設けられた、対談形式の場です。当日のご案内では、対象を僧侶および寺族としていたにもかかわらず、

多くのご門徒の方にもご参加いただきました。

亭主（大村英昭 客員研究員）が客人（ゲスト）に、最近の関心事である「儀礼」について尋ねていきます。特に、伝道の最前線にいる僧侶方が抱える疑問やジレンマに焦点を置き、もっと自信をもって、儀式や儀礼に臨んでいただくことを願った内容となっております。



対談する亭主・大村英昭師（左）と客人・天岸淨圓師（右）

対談の内容は、ニューズレター第一号「仏教儀礼」（本願寺仏教音楽・儀礼研究所、六月十日発行）をご覧いただくこととして、収録終了後に、客人である天岸淨圓師（行信 教授講師）より、ご法話をたまわりました。今日は、その一部をご紹介します。よろしくお願いいたします。

◎法話◎

真宗儀礼

— スタートとゴール —

天岸浄圓

(あまぎし じょうえん)

宗とは、超常識的なご法義の世界なのです。

■ 一般の人と、お寺さんの
距離感 42・195キロ

だから、一般的な宗教感覚の人と極めて激しい落差があるわけですね。ご法義が日常化している僧侶やご門徒の皆さんと、今初めて、親子連れ合いなりに先立たれて、その亡き人の行方を弔うところとの距離感、四二・一九五キロ離れているのでしょね。わかりますか。マラソンのスタートとゴールくらい違っているのです。

ちよつと、きついことを言います。
『歎異抄』の中に、

親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏申したること、いまだ候はず。

■ 超常識的な浄土真宗

私は最近、浄土真宗の儀礼についてお話をする機会に恵まれますと、みなさんは真宗に「どっぷり」浸か



真宗儀礼について語る天岸師

っている方々なんだと申すのです。浄土真宗のお寺や、意識の深い家庭で育てていただかれた方たちにとつて、真宗のご法義は日常です。しかし、「一般から見れば超日常なのですよ」ということを認識していただきたいと思うのです。

仏教そのものが、現実の社会からすれば、非日常であり、超常識的なのです。その仏教の中でも、浄土真宗は、さらに超仏教的なのですからね。だって、善人も悪人も皆同じように救うなんていう宗教は、一般には理解し難いですよ。だから浄土真

という、非常に過激な言葉がありますね。この内容は、「ご法義は死んだ人のためにあるのではないんだよ。また、個人的な親を救うためのものではないんだよ」ということです。その理由として、

一切の有情はみなもつて世々生々々の父母・兄弟なり。いづれもいづれも、この順次生に仏に成りてたすけ候ふべきなり。

と言われたのですから、助け、助けないではないのです。自分の個人的な父親、母親だけが助ける対象ではないんだよという、強い表現を取っています。

初めの「父母の孝養のために」の孝養というのは、追善供養の意味です。追善供養のためにお念仏というものは、私が生死を超え

ていくための道なのです」と言っておられるのです。これ、正論ですね。正論ですけれども、このたび初めて、自分の親なり連れ合いなり、また、逆縁で子どもさんに先立たれて、そして、その行方を何とかできないかというような思いを持っておられる方に、浄土真宗はこうなんですよと、『歎異抄』の言葉を言ったとしたら、これは大変厳しい。「こんな宗教いらんで」と言いたくなると思われませんか。

■ 正論が通じる社会と、 そうでない社会

「普通の人々」は、自分の父親なり母親なりが死んで初めて、その行く先を案ずるところから出発するのではないのでしょうか。自分が思うような供養をしたい、でも、お寺さんはしてはいけないと言う。そ

れで、お寺さんに、では何をすればいいのかと尋ねたら、「お寺に参って、自分自身のこととして仏教を聴聞しなさい」と言われる。でも、それはしたくないのです。自分のための仏教は、聞きたくないのです。亡くなった人のための仏教が欲しいのです。それなのに、仏法を自分のために聞きなさいと言ったら、せっかく自分が思っていることが全部浮いてしまっているわけですね。

お寺の住職が考えるスタートは、実は超日常のゴールなのです。そのゴールに向けて、宗教を始めたばかりの人を、どういうふうに親鸞聖人の教えに、ここを向けていただくことができるか、超日常との距離をどう埋めていくか、というようにこのことについての考えが重要となってくるのではないのでしょうか。

■ ステップ（段階）を踏む

そのときに、宗教的意識というものには段階性といえますか、ステップ・バイ・ステップのプロセスが伴うのです。そういう部分を私たちは、どう学んでいくか、どう共に歩むことができるかということをも、もう少し本格的に学んでおく必要があると思うのです。

もっと申せば、スタート地点にいる人に向けて、いきなり「もの申す」のではなく、まずは同じ地点に立ち、同じ気持ちになって、ゴールに向けて少しずつ歩みを共にすることが大事なことだと思ふのです。そういったプロセスについて、皆さまと共に考えていきたいと思っています。

（行信教校講師）

儀礼論研究会では、今後もさまざまな角度から「儀礼」について研究していきます。また、その研究成果は、随時、「宗報」や当研究所ホームページにてお知らせいたしますので、ぜひ多くの関心をもって、ご意見やご助言をいただきたいと思います。

（本願寺仏教音楽・儀礼研究所常任研究員）

本願寺仏教音楽・儀礼研究所
ニュースレター第11号『仏教儀礼』



全寺院への配付を取り止め、
ご希望の方にお送りいたしております。
（頒価無料）

教学伝道研究センター

TEL 075-371-9244

FAX 075-371-5761